

認知症あんしんサポーター講座 ー認知症とその介護について学んでみませんかー

日時 平成21年6月25日 15:00～17:00

場所 京都大学女性研究者支援センター

参加者 教職員、学生 10名

プログラム

1. 講義（認知症についての理解）
2. DVD視聴（認知症対応型デイケアの取組）
3. 体験談（認知症の人と家族の会）
4. 認知症の方への接し方、お役立ち情報
5. 意見交換

京都市左京南地域包括支援センターのご協力を得て、「認知症あんしんサポーター講座：認知症とその介護について学んでみませんか」を開催しました。

はじめに、出木谷医師より、「認知症は古くて新しい」というテーマで講義がありました。認知症の定義、85歳以上の4人に1人が認知症であること、老化によるもの忘れと認知症によるもの忘れの違いなどをお話いただきました。また、アルツハイマー型認知症のワクチン療法の研究についても説明をしていただきました。認知症の予防、治療は、研究途上ですが、ある研究事例を提示し、認知症の予防には、(1) 脳の機能をしっかり使うこと、(2) 他者との交流を持つこと、が大切であるとのお話がありました。

続いて、ある地域のデイケアセンターの様子を視聴しました。「自分の物忘れが多く、まわりに迷惑をかけていることがつらい」など、参加者一人一人が、自分のもの忘れを直視し、伝えることによって、自分もまわりの人も、少し気持ちが楽になるという取組を紹介いただきました。

また、「認知症の人と家族の会」の原田眞美様は、義母の介護体験をありのままにお話し下さいました。本人も家族もみながつらい思いをかかえて、行き詰ってしまった時は、自分たち家族だけで対処しようとせず、外に協力を求めているのですよ、という言葉が印象的でした。

そして、京都市左京南地域包括支援センターからは、認知症の方への接し方、お役立ち事項など、具体的な情報提供をいただきました。家族のもの忘れがひどく、困った時には、どうしたらよいか。まずは、専門医の診断を受けること。それから、介護保険サービスをよく知って、利用のための手続きをすること。恥ずかしいなどと思わず、生活の場である近所には、早く知らせること。何よりも大切なのは、認知症の人に怒ってはいけないということです。各地域に包括支援センターなど、相談機関があるので、早めに相談した方がいいとのことでした。

最後に、参加者との意見交換を行いました。この講座に参加した動機、実際にどのように被介護者に向き合っているか、そして、どんな

ことで困っているかという話が、次々と出され、予定時間を大きく超過しての閉会となりました。

＜講座後のアンケートより＞

- ・私には、時期を得た、大変有難い開催でした。
- ・医学的なお話や、実際の体験などをうかがうことができ、大変興味深いと感じました。
- ・本講座では、日頃容易に聞くことができない医学関係の専門家から身近に話を聞くことができ、疑問に感じていた事を質問することができました。
- ・認知症の症状は、介護者は日頃から経験していることなので、それを重ねて聞くことは辛いことです。
- ・「認知症は怖くない」「認知症によって人格がすべて失われてしまうものではない」ことが、世の中に普通に受け入れられる日が、早く来ることを願っています。
- ・行政の制度だけでは、不完全です。それを踏まえた上で、いかに制度を活用するかが必要なことなので、このような講座等を通して、情報を得ることが大変重要だと思います。
- ・介護の経験が豊富な地域包括支援センターの方からは、介護に関わる細かく具体的な話をうかがうことができました。
- ・介護は、主介護者一人が抱え込む傾向があり、また抱え込まなければならない状態に追い込まれています。特に男性介護者の場合に、その傾向が顕著です。
- ・自分だけで悩まず、沢山の方々のお話が聞ける場に出て行ける機会を、多く設けることが必要と痛感しました。
- ・介護者は、何にも増して、誰かに自分の状態を聞いて欲しいと思っています。
- ・介護は、常に何となく不安で判らない思いが付きまといますが、介護を行っていくことに、大きな示唆をいただきました。

終了後、参加者は、認知症を支援する「目印」となるブレスレット(オレンジリング)をいただきました。

(担当：育児介護支援事業 WG)



夏休み キッズ サイエンス スクール

8月17日（月）から21日（金）の5日間、「夏休みキッズサイエンススクール」を開催しました。女性研究者が研究・教育に十分な時間がとれるように、また、子どもたちが自然科学に興味を持ってくれるようにと、毎年、小学校の夏休み期間に開催しています。3年目の今回も非常にたくさんの参加申込があり、抽選で各日12名の参加者を決めました。参加者は、小学校1年生から3年生の子どもです。スクールの午前中は、保育士による工作などの取組みで、午後は、いろいろな分野の先生や協賛企業による科学教室です。

<1日目>

稲葉センター長の挨拶で、今年度のスクールを開校しました。まずは、ひとりずつ自己紹介です。最初は、緊張していましたが、話しはじめると元気が出てきて、保育士さんの自己紹介時には、たくさんの質問が飛び出しました。

元気が出てきたところで、みんなで少し体を動かす遊びをしました。そして、「キッズサイエンススクール新聞」づくりに取り組みました。

お弁当を食べたあとは、いよいよ科学教室

です。学術情報メディアセンターの喜多先生、工学研究科の引原先生と院生の南さん、呉さんによる、「光と水のマジック」教室です。レーザー光線を直接見ないようにと注意を受け、実験を始めました。光の屈折の実験を見せてもらい、子どもたちは大喜びでした。光の屈折のマジックでは、何とかタネあかしをしようと、一所懸命に考えていました。



<2日目>

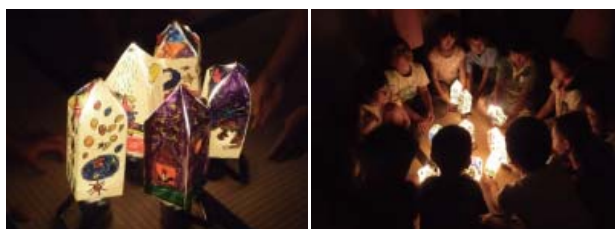
朝の挨拶のあと、自己紹介をしました。午前の取組みは、「牛乳パックのスタンドグラス作り」です。みんなあれこれと工夫を凝らして、時間切れになってしまいました。いったん中断し、お弁当のあと、今日の科学教室の場所である学術情報メディアセンターに出発しました。道中でスタンドグラスを見つけ、またまた工夫の要素が見つかったようです。

今日の科学教室では、合成ビデオを作成します。子どもたちは、3つの班にわかれ、カメラ、編集、美術の3パートの役割を順に体験します。まずは、合成ビデオに使う絵などの美術品づくりです。とってもユニークな宇宙人



が誕生しました。そして、合成用の魔法の青色マントを試して、透明人間に変身しながら、ビデオの作成方法を教えていただきました。学術情報メディアセンターの喜多先生、棕木先生、元木先生をはじめ、たくさんの教職員の皆様に教えていただいて、大満足で帰ってきました。また夕方には、元木先生が合成ビデオのDVDをセンターまで持ってきてくださり、子どもたちは大喜びでした。

おやつのはじめ、午前中に取り組んだ「牛乳パックのスタンドグラス」を完成させ、電燈を灯してみました。暗室に入って、みんなで幻想的な世界を体験しました。



<3日目>

午前中は、残像効果を利用した「ぱらぱらマンガ」と「くるくるアニメーション」を作成しました。お互いの作品を、見せ合って、楽しみました。

午後は、農学研究科の那須田先生にお越しいただき、「食べ物の不思議」の科学教室でした。どんなに背の高い木でも、根っこからてっぺんまで水分が行っているけれど、どうやって吸い上げているんだろうといったことを実験をしながら、理由



ドキドキ わくわくの 5 日間

を説明してくださいました。そして「葉脈の見えるしおり」を自分で作って、顕微鏡で観察し、きれいといって歓声をあげていました。

< 4 日目 >

まず、チームになって「転がし入れコリントゲーム」を作成しました。自分たちだけのゲームを作って、楽しみました。

午後は、株式会社村田製作所様のご協力で、ロボットの「ムラタセイサク君®」がセンターに来てくれました。ロボットが倒れないようにどのようにバランスを取るか、セイサク君ができるまでの工夫などを説明していただいたあと、平均台の上を自転車に乗って動く走行実演をしてくださいました。その後、太陽電池や部品をいただき、一人ずつ電子オルゴールを作りました。出来た子どもから、窓の近くに寄って、太陽電池で発電をさせてオルゴールのメロディーを楽しみました。



< 5 日目 >

今日は、みんなが探偵になって、指紋検出をしました。自分の手形に 5 本の指全部の指紋を貼りました。

午後は、総合博物館に行きました。展示室で各地の



音を聞いたり、昆虫の標本などを見て回りました。その後、動物の骨や貝の標本を実際にさわらせてもらったり、炭酸水づくりをして楽しみました。



< 反省会 >

最終日のスクール終了後、参加児童の保護者に集まっていただき、反省会を実施しました。その中で、保護者から出された意見を紹介します。

- ・センターに来る時の、子供の自転車のスピードが日ごとに速くなるくらい、うちの子供は喜んでいました。今後もぜひ続けていってもらいたい。
- ・できれば規模を少しでも大きくし、たくさんの子どもが参加できるようにしてもらいたい。
- ・ボランティア教員で成り立っていると聞いたので、私もサポートしていきたい。
- ・科学教室講師の募集を大々的にやってはどうか。
- ・受益者負担という意味で、おやつ代だけでなく、工作の材料費なども自己負担にすればよい。
- ・この取り組みは、3 年目とのことだが、スクールのことは今年初めて知った。ポスター、メールで広報しているそうだが、これまで知らなかった。

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

(担当：育児介護支援事業 WG)

第 19 回全国病児保育研究大会に参加

7 月 25 日・26 日に千葉県の幕張で開催された第 19 回全国病児保育研究大会に、病児保育室より看護師 1 名・保育士 1 名が参加し、H21 年 3 月に行った感染隔離室設置に関する意識調査をもとに「**京都大学における感染隔離室設置に関する調査**」という演題で、ポスター発表を行いました。会場では、多くの方々に発表を聞いていただきました。

座長の小島博之先生(東小岩わんぱくクリニック 病児保育室東小岩わんぱく)からは、『感染隔離室を大学病院に設置するには、環境設備などについていろいろ大変なこともあると思いますが、ぜひ、京都大学病児保育室にも感染隔離室が設置されることを期待しています。』と、ご意見をいただきました。

セミナーでは、菌部友良先生(日本赤十字社医療センター小児科顧問・「VPD を知って子どもを守ろう。」の会代表)の講演「ワクチンで防げる病気 (VPD) からど

うお子さんを守るか？」がありました。世界的にみて日本の予防接種状況が悪く、正しい知識が報道されていない事など多くの問題があることを学びました。VPD の恐ろしさ・副作用のついての正しい知識を知ることが大切であると感じました。これまで病児保育室利用者にワクチン接種の有無を確認してきましたが、今後は積極的にワクチン接種を励行するよう勧め、病児保育室内の感染予防に役立てていきたいと考えています。

また、他の病児保育室の方々と意見交換ができ、今後の京大病児保育室での看護・保育に役立てたいと思います。

(病児保育室)



連載：研究者になる！－第19回－



教育学研究科・教授

稲垣恭子

「研究者になる！」というタイトルで何かを書くのはちょっと居心地が悪い。そんなに明確な見通しをもって「選択」したわけではなかったし、その後の過程もあちこちに頭をぶつけながらの試行錯誤の連続

だったなあと思うからである。ただ、外から、たどったコースだけみると、学部からずっと同じ分野を専攻し、大学に職を得て現在まできているという一本道である。脇目もふらず邁進したといえたらいいのだが、実際はむしろ迷いつつ手探りできたというしかない。

教育学部に入ったけれど、「教育」への期待よりも漠然とした不信感を感じることが多かったわたしが、結局ずっとそれとつき合うことになったのも思えば不思議である。教育にあまり前向きではなかったこともあったのか、たまたま出会った「教育の逆機能」とか「意図せざる結果」というキーワードに親近感を覚え、だんだんと教育や社会生活一般についての違和感を社会的に解くことに興味をもつようになった。そのうち、「教育」そのものを研究するというよりも「教育で」考えるというスタンスもありなんだと気づいて面白くなった。

そんなことで急に進学することに決めたので周囲も驚いたが、入ってから専攻した教育社会学では博士課程まで進学した女子学生はこれまでにないと知って、わたしのほうも驚いた。その1978年頃には大学院への進学も身近な進路になりつつあったが、まだ職業キャリアとしてライフコースが描けるほど制度化されていたわけではなかった。女子に限ったことではないが、先行きは不透明だった。大学院もいわゆる「学問共同体」的な場から、制度化されたキャリア形成の場へと移行する過渡的な時期だったようにおもう。そんななかで、モデルもなく無

手勝流の勉強でいつも不安だったが、自由さもあった。

研究会や共同研究での議論も、成果とは別に共通の基盤の確認と新しいアイデアの発見の場にもなっていたように思う。共同研究はまとまらないことも多いが、大学院の間に研究室ではじめて行った共同研究も経験した。全体の枠組みより自分の仮説やストーリーにこだわって長時間議論して疲れることもしばしばだったが、自分にはないような切り口に会ってはつと思いつくことも少なくなかった。もうひとつ、決まったテーマの下での共同研究やプロジェクトとしてではなく、新しいテーマを発掘して、十分に練れていなくても大胆な仮説を紹介し合うという気楽な研究会を長く続けていたが、それも「教育」という規範的な現象に対する社会的リアリティの感覚を磨く場になったのではないかとおもう。研究のインセンティブは「現実」に対する違和感を生活とは別次元の方法で埋めたいという衝動によるところが大きいと思う。教育社会学がその方法としてわたしに合っていたのか、やっているうちに合ってきたのかかわからないが、だんだん思考法が身についてきたように思う。

研究では、これまで主に校風や生徒のサブカルチャーなど学校に独特の文化について、それが形成される相互行為に焦点づけた研究から出発して、最近ではより歴史社会的な方向に関心が広がってきている。とくに最近の関心は、「たしなみ」「師弟関係」「女性の教養」など、近代教育の前提のなかでは正面からあまり取り上げられてこなかった教育の側面を歴史社会的な視点から掘りあげてみたいということにある。資料を読んでいるのは嬉しいが、日常の感覚から遠くなったこれらの対象をどうやって「現在の歴史社会学」にしていけるのか、試行錯誤しながら取り組んでいる。



■平成21年度保育園入園待機乳児保育室を開室（9/1）

お知らせ 女性研究者支援センターにて、自治体認可保育園入園を待機中の乳児（平成22年3月末で15か月未満児）の保育室を開室しています。開室時間は、月から金曜日の9時から18時です。

■女性のための相談室 開室日

9月4日、11日、18日、25日 10月2日、9日、16日、23日、29日、 11月5日、13日、19日、27日

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>